

一般部門

一般部門 最優秀賞

楽しい話とすてきな 笑顔と安心を

もりた きんや
【愛媛県・森田欣也】

私にはまだ、五円玉の穴ほどの目、大きな口、だんご鼻、福耳、まあいい言葉が残っていることを教えてくれた。

ポキポキポキ。枯木でも折るような音が、青空に響き渡った瞬間、体の自由、心の自由、夢、生きる希望。全て一瞬に失った。18歳だった私に突きつけられたのは、第三頸椎脱きゅう骨折という、あまりにも厳しくて、受け入れる事のできない現実だった。

7年ほどの入院生活の後、四肢まひの障害が残ったまま自宅へ帰った私のところに、近所の小さな病院から、当時、まだ珍しかった訪問看護師が来てくれるようになった。まるで、壊れたロボットのような私に、毎回、毎回、毎回、楽しい話をたくさんしてくれていたある日、何かに気付いたように「俳句作ってみない？ 次までに一句ね」と指切りされた。

来客の 姿、日増しに 雪だるま

そんな小学生の宿題のような俳句を「上手、面白い、うまいやん、すごい」と、とにかく褒めてくれた。胸のあたりがなんかムズムズしてきた。

窓を開けると、鉛のような雲が、ひらがなのような雲に変わっていた。つくしやふきのとうがおいしく感じられた。雨ににおいがある事を知った。眠れなくて怖いだけだった夜も、虫の声に「必死に口説いているんだろうな」と、想像するだけで楽しくなってきた。

来る日はウキウキし、来られない日はスースーする。これからも俳句を続けて、生きている証の本を「いつか絶対に出版しよう」と言う話にワクワクしてきた。百回の「ありがとう」に、百一回の「ありがとう」を返してくれる、その笑顔にドキドキする。そしてもうひとつ、大切な大切な心が残っていたことを教えてくれた。

あの日から、20年近く経った今でも、心の訪問看護に来てくれている。楽しい話とすてきな笑顔と安心を、たくさんたくさん持って。